

関東大震災による鎌倉の歴史文化遺産被害と復興

Damage of Cultural Heritage Caused by Kanto-Earthquake and Recovery

中西典明¹・谷口仁士²

Noriaki Nakanishi and Hitoshi Taniguchi

¹復建調査設計株式会社 大阪支社設計室 (〒532-0004 大阪市淀川区西宮原1-4-13)

General Manager, Fukken Co.Ltd Osaka Branch Civil Design Division

²立命館大学教授 グローバル・イノベーション研究機構 歴史都市防災研究センター

(〒603-8341 京都市北区小松原北町58)

Professor, Ritsumeikan University, Ritsumeikan Global Innovation Research Organization

Kanto-Earthquake attacked Japanese representative historic city Kamakura in 1923 and reduced the city to ruins. This Earthquake also gave damages to 179 historic buildings and many cultural properties. Most of damaged buildings are not reconstructed as before earthquake, but reconstructed to recover its facility. It means that many cultural heritages lost its historical feature and value. As because the historical environment protected, many tourists visit Kamakura every year and they give large economic effect to the city. Large amount of funds are necessary for historical heritage maintainance and restoration from disaster. It is necessary to construct a management system that provides funds continuously from the economic effects of cultural heritage tourist resources to inherit historical heritage to the next generation.

Keywords : Kanto-Earthquake, Kamakura, economic effects, facility recovering

1. 関東大震災と鎌倉の被害概要

鎌倉は1192年に鎌倉幕府がおかれてから14世紀半ばまで武家政権の中心として日本の政治、武家文化、宗教の中心として栄えた。現代では、我が国有数の歴史的文化都市として多くの観光客を集めている。

関東大震災は、1923年（大正12年）9月1日に発生し、近代日本において最大の被害をもたらした地震災害である。この地震によって発生した火災、建物倒潰、土砂災害、津波による犠牲者は10万人を超える。また、地震による直接的な損失だけで55億円あるいは100億円と言われ、当時の国家予算の4倍から7倍という途方もない損失であった²⁾。この地震は鎌倉の歴史文化遺産に対しても未曾有の被害をもたらした。

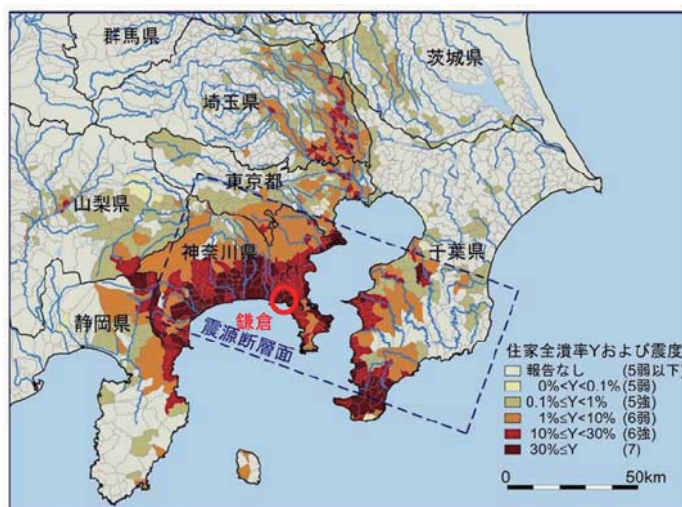


図1 住家全壊率と震度の分布 [諸井・武村 2002 より引用]
(破線は推定された震源断層の地表への投影を表す)²⁾

関東大震災の住家全壊率と震度分布、推定震源断層の地表への投影は図1に示すとおりであり、鎌倉は推定震源断層面の直上に位置し、震度7、住宅全壊率が30%を上回る壊滅的な被害を受けた。

さらに鎌倉は、関東大震災の際、強震による被害だけでなく、南を海に面し東、北、西を山で囲まれた地形的特性によって、海岸部で津波、内陸部で多くの土砂崩れ等の二次的な被害の発生が報告されている。



図2 鎌倉の地形



図3 由比ヶ浜の津波被害の状況¹⁾

2. 歴史文化遺産の被害

(1) 建造物の被害

関東大震災によって、鎌倉市内の寺社建造物のほぼすべてが、何らかの被害を受けた(図4)。

被災前に国宝に指定されており、現在も引き続き指定を受けているのは、円覚寺舍利殿の1堂のみである。

建築物の被害として、全壊 133 堂宇をはじめ、大破、倒壊、半壊、少破を含めると 179 堂宇の被害が記録されており、鎌倉市域のほぼすべての寺社が被災した。すなわち、鎌倉の歴史文化遺産建造物は、地震によって壊滅的な被害を受けた。

建造物の被災状況は円覚寺舍利殿(図5)、極楽寺本堂(図6)や鶴岡八幡宮の被災状況写真(図7)に見られるように、屋根の形を残して柱、壁が押しつぶされる形での崩壊が特徴的である。

これらの被害は、震度7の地震の強烈な加速度によって柱、梁の耐力を超える屋根荷重が作用したことを示している。極楽寺、円覚寺舍利殿の被災写真に示されるとおり、当時、屋根は茅葺きであるが、茅葺き屋根が大きな体積を有し、トップヘビーな構造であったことが影響したと推定される。

鶴岡八幡宮拝殿は、壁のない柱、梁構造であることから、地震に対する耐力が低い構造であり、比較的軽量の屋根荷重でも

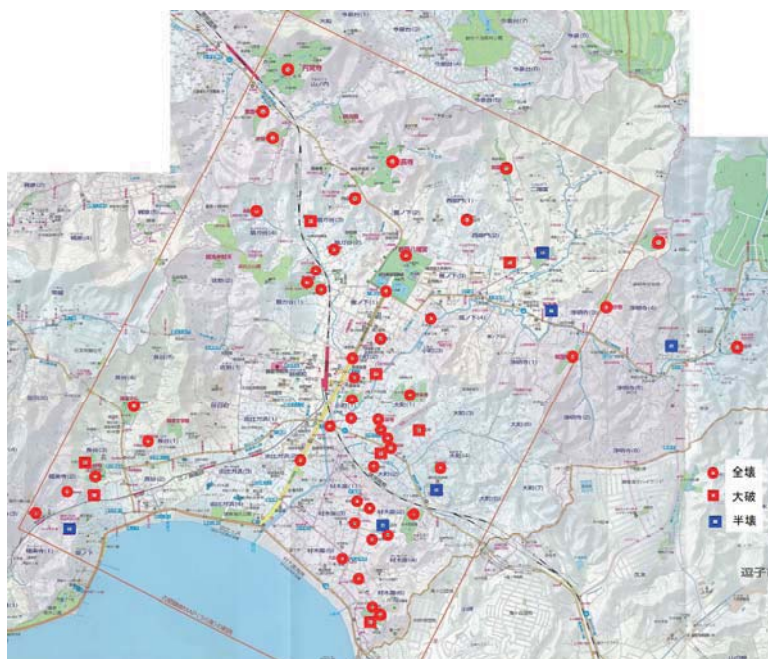


図4 被災した寺社の分布



図5 円覚寺舍利殿の被災状況

崩壊に至ったと推定される。

これらの被災形態は阪神淡路大震災や東日本大震災の寺社建造物にも同様な崩壊形態が見られ、寺社建造物の典型的な被災形態である。



図6 極楽寺本堂の被災状況¹⁾

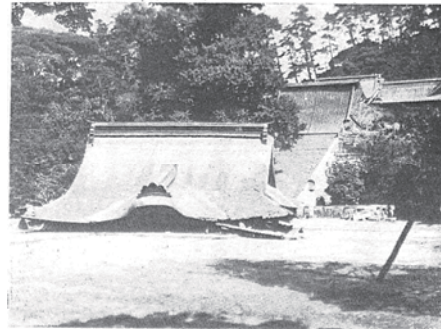


図7 鶴岡八幡宮の被災状況¹⁾

鎌倉は3方を急峻な山に囲まれた地形であり、多くの寺社が急崖に近接して建てられていた。

このため、建長寺被災状況(図8)に示されるような斜面崩落に伴う崩壊も多く見られる。鎌倉震災誌には、11社寺で山腹崩壊の記録がある。中でも坂の下星月ノ井の山腹にあった虚空蔵堂は山の崩壊とともに埋没し、跡形もなくなったことが報告されている。

関東地震前日の8月31日から9月1日の午前9時頃にかけて、神奈川県下では県北西部を中心とするかなりの降雨があり、鎌倉近隣の藤沢市でも19.5mmの降雨が記録されている(図9)。この雨で土砂災害が発生しやすい状態になっており、関東地震の強震によって地滑りが多発して被害を大きくしたと推定される。



図8 建長寺方丈の被災状況¹⁾



図9 1923(大正12)年8月31日の等雨量線²⁾
[作成:井上公夫]

表 1 被災建造物数

種別	名称	全壊	大破	倒壊	半壊	少破	計
神社	鶴岡八幡宮	6 (鳥居 3)	5		—	—	11
	鎌倉宮	—	—	1	—	—	1
	八雲神社	—	—	1	1	—	2
	五所神社	1	—	—	—	—	1
	神明社	1	—	—	1	—	2
	御霊社	—	—	—	1	—	2
	八坂大神	1	—	—	—	—	1
	熊野新宮	1	—	—	—	—	1
	巽神社	1	—	—	—	—	1
	荏柄天神	—	—	—	1	—	1
	蛭子社	—	—	—	1	—	1
	計	11	5	2	5	0	23
寺院	寿福寺	2	—	—	—	—	2
	英勝寺	3	1	—	—	—	4
	浄光明寺	3	—	—	—	—	3
	覚円寺	1	—	—	—	—	1
	瑞泉寺	3	—	—	—	—	3
	報国寺	3	—	—	—	—	3
	浄妙寺	1	—	—	—	—	1
	光蜀寺	1	—	—	—	—	1
	宝戒寺	4	—	—	—	—	4
	本覚寺	6	—	1	—	—	7
	妙本寺	9	—	—	—	3	12
	案養院	2	—	—	—	—	2
	妙法寺	3	—	5	—	—	8
	長勝寺	4	—	2	—	—	6
	補陀落寺	2	—	—	—	—	2
	光明寺	4	2	—	—	—	6
	高德院	1	—	—	—	—	1
	長谷寺	—	8	—	—	—	8
	極楽寺	4	—	—	—	—	4
	建長寺	16	—	—	—	—	16
	円応寺	2	—	—	—	—	2
浄智寺	8	—	—	—	—	8	
東慶寺	2	—	—	—	—	2	
円覚寺	22	—	2	—	—	22	
その他	16	—	—	5	5	26	
計	122	11	10	5	8	156	
合計	133	16	12	10	8	179	

(2) 文化財被害

鎌倉震災誌¹⁾には、表 2 に示す関東大震災による文化財被害が記録されている。当時「国宝」に指定されていた仏像や書物等の文化財 11 点も大きな被害を受けた。特別保護建造物の指定を受けていた長谷の大仏（鎌倉大仏）は、台座から 35.8 cm 前に動いた(図 11)。

被災した文化財の内、焼失を免れた文化財は補修されて現存しているが、現在、鎌倉には国宝指定を受けている仏像等の文化財は無い。国宝の指定を外された文物は、その文化財としての価値が、災害による損傷によって減じたと結果と考えるのが妥当である。

表2 主な文化財被害一覧（赤字は国宝）

寺社名	文化財被害
寿福寺	二王像破損
覚園寺	国宝地藏菩薩像大破、他仏像 28 体大破
瑞泉寺	国宝夢想国師木像破損、その他仏像 2 体破損
報国寺	仏像 2 体破損
宝戒寺	国宝地藏菩薩破損、国宝歓喜天像、他仏像 5 体破損
本覚寺	釈迦三尊二天木像他仏像 1 8 体破損
妙法寺	仏像数体破損
高德院	大仏（特別保護建造物）1 尺 5 寸南に移動台座右後側三寸沈下前側 1 尺五寸沈下
長谷寺	観音像少破
極楽寺	国宝釈迦如来像二体破損、不動明王像破損十大弟子像破損
建長寺	国宝北条時頼坐像、須彌壇、仏殿本尊丈六地藏尊、仏像十数体以上破壊
円応寺	国宝閻魔王、俱生神像、初江王像、その他十二体破壊
浄智寺	国宝地藏菩薩木像、その他数体破壊
東慶寺	国宝聖観世音木像、その他仏像数体
円覚寺	国宝足利尊氏筆法華経焼失



図 10 高德寺大仏（2010.12）

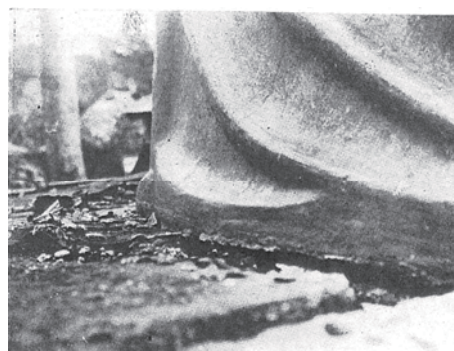


図 11 高德寺大仏の台座からのズレ¹⁾

3. 復興状況

(1) 建造物の復興状況

被災前の状況を示す資料は少ないが、震災時の記録写真と 2010 年 12 月の調査結果を比較すると、被災建造物は原型復旧ではなく、機能復旧で整備されたものが多い。すなわち、被災前の形で復元された建造物は少なく、本堂や拝殿といった建造物の機能を満足する形で復旧され、歴史文化遺産として継承すべき形状や構造を復元された建造物は少なかったものと推定される。

全壊した建造物で被災前と同じ構造で復元された建造物は、円覚寺舍利殿、鶴岡八幡宮拝殿等わずかである。その他の建造物は、規模は大きく変わらないが、屋根などの構造が被災前と大きく変更されており、鎌倉寺院の特徴を失っている建造物が多い。たとえば極楽寺などの寺院は、被災以前の建造物として特徴的であった茅葺きの屋根から瓦葺きに変更されている（図 12、図 13）。

さらに、建長寺の山門や方丈は、京都般舟三昧院から移築された建物を使用して昭和 15 年に復旧され、震災前と全く異なる構造で復興されている。このような寺院建造物の移築は、過去にも各地で行われているが、歴史遺産としての特徴を失うことになり、歴史遺産、文化の継承という点では再考が必要と考える。

また、原型復旧されなかった原因の一つに、被災前の構造を再現可能な資料、設計図等の不足が考えられる。歴史的建造物は主構造に手を加えることが難しいため、関東大震災のような数百年に 1 回の大規模な地震に対する耐震補強は極めて難しい。よって、歴史的文化遺産の継承には、保全対象の歴史遺産建造物の

構造、材料などを十分に調査・解析を実施して被災時に再現が可能となる資料を準備しておく必要がある。



図 12 建長寺山門（被災時）¹⁾



図 13 建長寺山門（2010.12）



図 14 極楽寺本堂（被災時）¹⁾



図 15 極楽寺本堂（2010.12）



図 16 円覚寺舍利殿（被災時）¹⁾

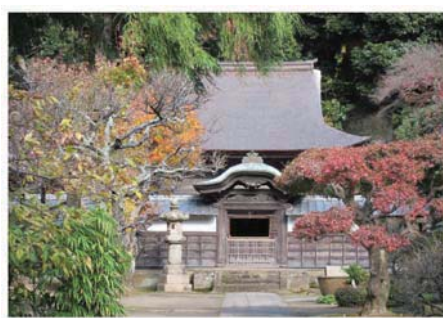


図 17 円覚寺舍利殿（2010.12）

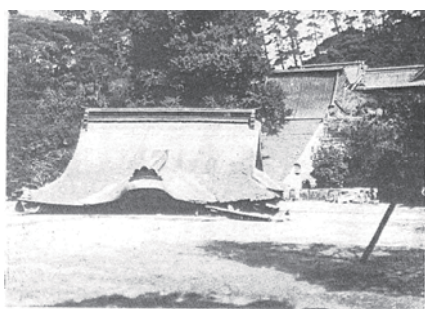


図 18 鶴岡八幡宮（被災時）¹⁾



図 19 鶴岡八幡宮（2010.12）

(2) 観光都市としての復興状況

まもなく関東大震災発生後約 90 年を迎える鎌倉市の年間入込観光客数は、平成 21 年度で 1,883 万人に上り、このうち外国人観光客数は 60 万人程度と推計されている。主要な寺社の周辺には小町通など、観光客を対象とするたくさんの土産物店や商店が建ち並び、常に賑わっている。関東大震災によって多くの歴史的建造物や国宝とされていた文化財が破損したが、寺社の庭園や鎌倉を取り巻く景観は守られており、観光客は歴史文化遺産の価値だけでなく、歴史都市としての景観や雰囲気を楽しむことを目的として鎌倉を訪れている。

観光客による消費額合計は平成 21 年で 654.6 億円と推計されており、その経済的効果は極めて大きい。

表 3 に京都市および奈良市と鎌倉市を比較する。観光客数は京都市の 40%であるが、観光消費額は京都市の約 1/10 であり、一人当たりの消費額が極めて少ない。これは、首都圏から近く日帰り観光客が多いため宿泊を伴う観光客が少ないことによるが、いずれにしても、京都、奈良と同様に鎌倉には多くの観光客が訪れて鎌倉の経済を支えている。

表 3 鎌倉市と京都市の観光客数と観光消費額^{3),4)}

	観光客入込数 (千人)	観光消費額 (千円)
鎌倉市	18,834	65,462,613
京都市	46,896	608,808,000
奈良市	14,351	224,700,000



図 20 小町通(2010.12)

4. まとめ

鎌倉の社寺は、鎌倉幕府が開かれて以来、社寺の被害が記録されている地震として建暦 3 年(1213)、仁治元年(1240)、正嘉元年(1257)、永仁元年(1293)、永享 5 年(1433)、明応 4 年(1495)、元禄 10 年(1697)があり、関東大震災(1923)を加えると、計 8 回も繰り返し地震の被害を受けてきた。しかし、鎌倉の社寺は鎌倉幕府や後の江戸幕府の時代に手厚い保護を受けていたことで、被災と復興を繰り返し、現在に至っている。

関東大震災の後、被災前の構造で立て直された寺社は少なかったが、鎌倉の寺社のほとんどは廃寺とならず、元の位置で復興されている。このことは、歴史文化遺産の継承という意味においては大きな損失を被ったといえるが、鎌倉の特長ある景観や町の雰囲気は残されたことで、現在、観光資源として多大な経済効果を生み出している。そしてこれらの経済効果が、鎌倉市民に対し、歴史文化遺産や歴史的な景観を守ることが必要であるとの意識をより強くしていると考えられる。

今後、歴史文化遺産の防災を考える上で、ただ単に文化財そのものだけでなく、景観や地形、周辺の家並みなどを含めたエリアの雰囲気を守る「エリア防災」の考え方が重要である。

災害によって被害を受けた文化遺産建造物の復旧費用の実績を表 4 に整理する。復旧費用は 1 m²当たり平均 430 万円と非常に大きな費用が必要となることがわかる。一方、経年劣化等によって必要となる修繕費用の例を表 5 に整理する。表 5 に示されるように費用は 1 m²当たり平均 38 万円と災害復旧費用の 10 分の 1 以下となっているが、一般の家屋に比べると高価な費用であり、かつ定期的、継続的に発生する費用である。

したがって、災害に備える費用と維持修繕費用を継続的に担保する仕組みを構築する必要があると考えられる。

表 4 文化財建造物の災害被害復旧費用

番号	被災年次	災害名称	名称	分類	所在地	建築種別 (用途)	床面積 (m ²)	総工事費 (円)	m ² 当り工事費 (千円)
D1	1995	阪神淡路大震災	八幡神社本殿	重要文化財	兵庫県宝塚市	神社(本殿)	3.6	75,739,000	21,156
D2	1995	阪神淡路大震災	長遠寺本堂・多宝塔	重要文化財	兵庫県尼崎市	寺社	232.1	29,474,400	127
D3	1995	阪神淡路大震災	旧岡田家住宅	重要文化財	兵庫県伊丹市	住宅(酒蔵等)	868.6	715,800,000	824
D4	1995	阪神淡路大震災	旧山邑家住宅	重要文化財	兵庫県芦屋市	住宅	542.4	540,013,904	996
D5	1995	阪神淡路大震災	旧神戸居留地十五番館	重要文化財	兵庫県神戸市	住宅	346.2	860,000,000	2,484
D6	1995	阪神淡路大震災	明石城巽櫓・坤櫓	重要文化財	兵庫県明石市	城	342.3	1,048,439,000	3,063
D7	1998.9	台風7号	醍醐寺開山堂・如意輪堂	重要文化財	京都市伏見区	寺院	404.1	180,000,000	445
D8	1998.9	台風7号	天満神社本殿	重要文化財	奈良県吉野郡	社寺	21.1	118,000,000	5,598
								平均(m ² 当り)	4,337

表5 文化財建造物の修繕費

番号	名称	分類	所在地	建築種別 (用途)	材質、構造	床面積 (m ²)	総工事費 (円)	工事費(千円) m ² 当り	工事種別
M1	十輪寺本堂	重要文化財	兵庫県高砂市	寺院	木造	650.0	157,750,000	243	修理
M2	長遠寺本堂	重要文化財	兵庫県尼崎市	寺院	木造	213.5	151,810,000	711	修理
M3	本興寺 方丈、開山堂	重要文化財	兵庫県尼崎市	寺院	木造	414.1	118,510,000	286	修理
M4	旧平山家住宅	重要文化財	青森県五所川原市	住宅	木造	363.0	83,200,000	229	修理
M5	石場家住宅	重要文化財	青森県弘前市	住宅	木造	428.8	97,500,000	227	修理
M6	笠石家住宅	重要文化財	青森県上北郡	住宅	木造	191.3	34,800,000	182	修理
M7	小原家住宅	重要文化財	岩手県東和町	住宅	木造茅葺	204.4	40,900,000	200	保存修理
M8	旧後藤家	重要文化財	岩手県奥州市	住宅	木造茅葺	232.9	7,550,000	32	修理
M9	旧中村家住宅	重要文化財	岩手県盛岡市	住宅	木造棧瓦葺	430.2	32,925,000	77	修理
M10	旧菅野家住宅	重要文化財	岩手県北上市	住宅	木造茅葺	250.8	18,300,000	73	修理
M11	伊藤家住宅	重要文化財	岩手県花巻市	住宅	木造茅葺	120.1	29,418,525	245	保存修理
M12	藤野家・ 佐々木家住宅	重要文化財	岩手県奥州市	住宅	木造	342.4	71,730,000	210	保存修理
M13	旧神戸居留地 十五番館	重要文化財	神戸市中央区	商館	木骨煉瓦造	346.2	206,099,900	595	保存修理
M14	新薬師寺	国宝	奈良市高畑町	寺院	木造	374.6	521,575,960	1,392	保存修理
M15	旧犬養家住宅	重要文化財	岡山県岡山市	住宅	木造瓦葺	207.2	76,052,580	367	修理
M16	旧笹川家住宅	重要文化財	新潟県西蒲原郡	住宅	木造	1837.6	124,000,000	67	保存修理
M17	丸岡城天守	重要文化財	福井県坂井郡	城	木造	269.1	28,040,000	104	修理
M18	同志社彰栄館	重要文化財	京都市	校舎	鉄骨煉瓦造	571.5	207,850,000	364	修理
M19	金剛峯寺不動堂	国宝	和歌山県伊都郡	仏堂	木造	141.9	247,021,392	1,741	修理
M20	伊佐家住宅	重要文化財	京都府八幡市	住宅	木造	118.6	47,000,000	396	修理
M21	谷口家住宅	重要文化財	福井県越前大野	住宅	木造	184.9	45,000,000	243	修理
							平均(m ² 当り)	380	

鎌倉の社寺は、繰り返し地震被害を受けて来たにもかかわらず、現代まで形を変えながら継承されてきた。もしも関東大震災で失われた歴史文化遺産が震災前の形で受け継がれていれば、さらに大きな価値を生み、海外からの観光客数の増加などによって、より大きな経済的効果を生み出していたことも想定される。歴史文化遺産の維持管理や災害時の補修、復旧には多大な費用を必要とする。過剰な観光客の増加には様々な負の効果もあることは否めないが、歴史遺産の存在によって得られる経済効果を歴史文化遺産の保護、継承に有効に活用するしくみを構築すれば、歴史文化遺産の維持継承や被災時の復旧に必要となる費用を確保することが可能となる。また、地元住民が文化遺産の経済的価値を認識することで文化遺産保護の動機付けを行うことが可能となり、文化遺産の継続的な保存につながると考える。

参考文献

- 1) 鎌倉町：鎌倉震災誌,昭和5年12月
- 2) 中央防災会議：1923 関東大震災報告書【第1編】,平成18年7月
- 3) 神奈川県ホームページ：平成21年神奈川県観光客入込数調査,
http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/06/0613/tokei/irikomi/irikomi_h21.html
- 4) 京都府ホームページ：平成21年観光入込客数及び観光消費額について,
<http://www.pref.kyoto.jp/kanko/1282693763136.html>
- 5) 奈良市観光協会ホームページ：平成21年度奈良県観光動態調査報告書,
http://www.pref.nara.jp/dd_aspx_itemid-15577.htm